



市長からの手紙

54 トリニダー

最近、テレビの旅番組で、キューバの「トリニダー」というまちを紹介しているのを見ました。キューバ島のちょうど真ん中辺りの南側、カリブ海に面したまちです。

かつて、砂糖の生産・輸出で経済的に大いに栄えた地域で、当時の砂糖生産者の豪邸や庶民の家が残っており、とてもしゃれていて、また、落ち着いた感じのまち並みが、旅行者のカメラ目線で映し出されていました。

18世紀に建てられたという屋敷の中も紹介されていましたが、200年以上も前の素晴らしい家具や調度品が今も使われていたり、イタリアから呼び寄せた画家に描かせた絵画があったり、当時のこの地域の繁栄ぶりをしのばせる姿が残っていました。

この地域には、7階建ての塔が残っており、当時6,000人以上いたサトウキビ畑で労働する奴隷を監視するための塔だという説明がありました。また、サトウキビから樹液を絞るための大掛かりな道具は、1台あたり60人以上の奴隷で動かされていたことが、現地の人言葉で説明されていました。まちには、こうした奴隷が生活していた家も保存されていて、当時の生活の様子が見られるような展示がされているそうです。

かつてアメリカ合衆国の綿花生産や、キューバ島の砂糖の生産は、このような労働力によって成り立っていたわけです。現地の人にとっては(歴史の)負の側面、あまり見たり、思い出したりしたくない事実であろうと思います。これを記憶・記録として残すのか否かについては、議論があった(現在もある)のだと思います。

負の側面を隠してしまうのではなく、当時の経済的繁栄を支えた過去の記憶・記録を歴史博物館のような形で外国からの観光客に見せ、維持し続けている「トリニダー」の人たちの考え方はすごい、と思いました。

川越市長 川合善明

環境にやさしい行動を目指して 12

コッパ
COP21とパリ協定

環境政策課 224・5866

昨年末、フランスのパリで国連気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)が開催され、「パリ協定」が採択されました。これは、深刻化する地球温暖化問題に各国が協力して対策を講じるための国際的な約束です。

先進国のみ温室効果ガスの排出削減が義務付けられた京都議定書。これに不満を持った国などが批准を拒否したことを教訓に、今回のCOP21では全ての条約締約国が参加するための話し合いが行われました。

パリ協定では、世界の平均気温の上昇を産業革命前と比べて2℃未満とすることを目標とし、さらに1.5℃未満にするこの必要性についても触れています。

また、各国が5年ごとに温室効果ガスの排出削減目標を見直し、より高い目標を設定していくことや、削減に向けた取り組みなどについて、定期的に報告、検証することなどが盛り込まれました。

日本は、平成42年までに同25年比で26%以上温室効果ガスを削減することを目標としています。また、電源構成における再生可能エネルギーの割合を同42年までに22〜24%にするとしています。

市では、川越市地球温暖化対策実行計画に基づき、節電などの省エネルギーの推進や再生可能エネルギーの導入促進などの取り組みを実施しています。今後もイベントや出前講座など、さまざまな機会を通じて、家庭における温室効果ガスの抑制等、環境配慮に関する情報を発信していきます。